

# 『ふくろう党』における登場人物の役割

福 田 完 治

## I はじめに

ひとが物語に接するとき、読者にページをめくる気持ちを起こさせるものは何であろうか。読者はその力をとくに意識するわけではない。しかし巧妙に作られた物語というものは、ひとを作品の世界へ誘いこんで最後まで放さないものである。

本論においては、読者を引きつける様々な要素の中で、登場人物の役割について考察する。ただし、ここで言う役割とはストーリーの展開にかかわるものではなく、読者が抱く人物像にかかわるものである。

そのために用いるテキストは登場人物が豊富かつ明確な役割を持っていることが望ましい。この点においてたとえばバルザックの小説は最適なものの一つであろう。彼の作り出した「人間喜劇」の世界は文字通り登場人物の宝庫である。ここではその劈頭を飾る作品『ふくろう党』を分析することにした。

以下、主要な登場人物を各個にみていくことにするが、まずこの作品の主人公ヴェルヌイユ嬢と モントーラン侯爵を次章で考察する (II)。そのあと物語に登場する2つのグループ、すなわち《青》と呼ばれる政府軍とふくろう党について、代表的な人物を取り出して扱う (III, IV)。またいずれのグループにも属さないコランタンについては単独にひとつの章をあてる (V)。そして最後に、これらの登場人物が複雑に対立しあう相互関係についてストーリー構成の面から考察する (VI)。

## II

## 1. ヴェルヌイユ嬢

この作品の中心人物といえるヴェルヌイユ嬢だがその登場は少し遅い。物語の約5分の1が過ぎたところで初めて彼女に関する描写がみられる。ただし、この時は名前も身分も語られない。《青》が護衛についていることだけがこの女性が重要人物であるらしいことを示している。一方彼女の性格は登場の最初から頻繁に描写される。

«—(...) Vois ces haies derrière lesquelles il peut se rencontrer des Chouans à chaque instant. Quand je regarde ces ajoncs, il me semble apercevoir des canons de fusil. J'aime ce renaissant péril qui nous environne.»<sup>(1)</sup>

«—(...) Les plates vicissitudes de la vie domestique n'excitent pas mes passions, tu le sais.»<sup>(2)</sup>

«—Que veux-tu, je me surprends à penser comme si j'avais cinquante ans, et à agir comme si j'en avais encore quinze.»<sup>(3)</sup>

いずれも彼女が登場してすぐに語る言葉である。これらの文章がヴェルヌイユ嬢の人格を説明してくれる。そこには危険を好む気質や激しい情熱そして矛盾をはらんだ性格を見いだすことができる。

とりわけ矛盾する感情のせめぎあい大きな特徴になっている。上記の引用でも分かるように、彼女の心は常に二つの対極の間を揺れ動いている。それは分別と無分別であり、恋と憎しみである。そしてそのどちらの場合も非常に極端なものである。憎いと思えば殺そうとし、恋しいと思えば結婚しようとする。彼女のモントーラン侯爵に対する感情は逆転の連続と言える。

加えて彼女の言動に関しては劇的なところが多く見られる。例えば彼女の任務が露見する場面では、デュガ夫人とつかみ合いを演じる。別の場面ではふくろう党がたてこもる館に、危険をかえりみず単身忍び込み危ういところを救われる。その最期も侯爵の身代わりで囮になって殺されるという華々しいもので

ある。こうした出来事が物語にアクセントをつけ、読者の関心を引く。言い替えば彼女の役割は、物語の中心人物としてストーリーを動かすと同時に読者を動かしていくことにある。

## 2. モントーラン侯爵

モントーランに関しては、まずガーという渾名についてユロが説明する。しかしこの青年が初めて登場してきたとき、彼がそのガーであることを明確に裏づける描写はみられない。ただふくろう党の一隊を指揮していることからその首領であることは判断できる。彼の登場はヴェルヌイユ嬢と違って、外見がかなり念入りに描かれている。

また彼の性格は最初の登場から少しおくれて語られ始める。それは郵便馬車襲撃の是非をめぐるふくろう党員たちとの議論をとおしてのことだが、そこで強調されるのはモントーラン侯爵が潔癖な王党派の貴族だという点である。

《—(...) Les défenseurs de Dieu et du Roi sont-ils donc des pillards? Par sainte Anne d'Auray! nous avons à faire la guerre à la République et non aux diligences. Ceux qui désormais se rendront coupables d'attaques si honteuses ne recevront pas l'absolution et ne profiteront pas des faveurs réservées aux braves serviteurs du Roi.》<sup>(4)</sup>

このように彼は終始自分の理想を貫こうとする。議論が交わされるにつれて、さらに物語が進むにつれて、若い侯爵の理想とふくろう党の戦士たちの現実の間の溝はいっそう深くなる。

《—Le Roi, répondit le jeune chef, c'est le prêtre, et je me bats pour la Foi!》<sup>(5)</sup>

《—Je ne veux plus commander, s'écria le jeune homme, qu'à ceux qui verront un Roi dans le Roi, et non une proie à dévorer.》<sup>(6)</sup>

以上の例は侯爵の国王への忠誠心と王党派としての理想から発せられる言葉であるが、彼のこうした純粹な精神は他人との関係においても顕著に現れる。それはヴェルヌイユ嬢との恋である。彼の性格が純粹であるだけにその恋心も

一途なものとなる。

例えばヴェルヌイユ嬢のことをすぐには信用しようとしないう他の貴族たちの態度が、かえって侯爵をかたくなに彼女を弁護させてしまうのである。逆にヴェルヌイユ嬢が政府の密命を帯びた女性であるということを知った時彼女を憎悪し軽蔑するようになる。

このようにモントーランは一貫して純粋な若者、理想主義者として描かれており、ふくろう党の中では特殊な存在である。物語の最初にユロの口から語られる《才能に富んだ屈強な若者》という印象より、純粋で一途な青年という側面が強調されている。その意味では彼は自分が指揮するふくろう党を代表するというよりは、より観念的な意味で王党派を代表する人物と言えよう。

### III

#### 1. ユロ

この物語の主な人物のうち最初に登場するのがユロである。彼の登場によって読者は前おきが終わって物語が始まることを告げられると言ってよい。そして彼は政府軍人を代表する人物として描かれている。

登場場面はそれほど多くないが、その各々の場面でユロはいつも軍人としての誇りと威厳をもって行動する。彼が備えている雰囲気については以下のような描写もみられる。

《Les pas pesants d'un militaire retentirent dans le corridor, et le commandant Hulot montra bientôt une mine renfrognée.》<sup>(7)</sup>

《Le lendemain, un homme se présenta brusquement devant elle sans être annoncé. Il avait un visage sévère. C'était Hulot.》<sup>(8)</sup>

この指揮官はその性格から、部下たちとは違ったタイプの軍人となっている。この点では、ちょうどモントーラン侯爵がふくろう党員と意識の上で大きな隔たりがあることと同じ関係といえる。もちろん上官と部下との信頼関係に

おいてはユロたち《青》のほうが圧倒的に強いのだが。

こうしたユロの性格は策略を使うのを潔しとしない。従ってヴェルヌイユ嬢がふくろう党の首領を籠絡せよとの密命を帯びていたのを知ると嫌悪を示す。同様にユロが物語中何度も示すコランタンへの軽蔑は、あくまでも潔癖な彼の軍人としての矜持の高さを強調することになる。その特徴は以下の台詞に最もよく表されている。

«Hulot prit l'espion par le bras, de manière à lui laisser l'empreinte de ses ongles dans la chair, et lui dit :

—Puisque ta besogne est finie par ici, fiche-moi le camp, et regarde bien la figure du commandant Hulot, pour ne jamais te trouver sur son passage, si tu ne veux pas qu'il fasse de ton ventre le fourreau de son bancal.»<sup>(9)</sup>

以上のようにユロが演じてみせるのは“頭の堅い”軍人であり、どちらかといえば軍隊の理想的なあり方を追求する人物と言える。そしてこれは前述のとおり“頭の堅い”王党派の指揮官モンロー侯爵と同様の役割といえることができる。

## 2. ジェラルールとメルル

ジェラルールもメルルもどちらも政府軍の現実的な兵士の例として登場する。後に比較的大きな役を演じる二人だが登場の場面では特に読者の注意を喚起するような描写はない。もちろん彼等は個性的な人格を持っている。しかしそれは兵士の一例という枠組を逸脱するものではない。

ジェラルールはユロの副官として文字通り彼の右腕として働いている。その性格も正義漢であり、上官であるユロのそれに近いものがある。一方メルルのほうは物語の中で《真のフランス軍人》と呼ばれている勇敢な人物である。ただしジェラルールに比べると柔軟な思考の持ち主で、冗談もとばすごく普通の若者としての描写もみられる。こうした二人の性格の相違点は以下の文章によく表れている。

《—J'aime mieux périr ainsi que de triompher comme vous, dit Gérard. Puis, en voyant ses soldats nus et sanglants, ils s'écria : —Les avoir assassinés lâchement, froidement !》<sup>49</sup>

《Merle s'aperçut de l'étonnement des Chouans, et, sans sortir de son caractère, il leur dit en souriant tristement : — Je crois pas, messieurs, que vous refusiez un verre de vin à un homme qui va faire sa dernière étape.》<sup>50</sup>

場面はヴィヴチエールの館で、《青》がふくろう党のたまし討ちにあって壊滅状態になったところだ。引用は追い詰められた二人の台詞で、この時ジェラルは高潔な兵士としての態度を崩さず敢然と死を迎える。一方のメルルは余裕のある台詞を並べて銃殺を免れる。

《—Adieu ! je pouvais trinquer avec mes bourreaux, je ne reste pas avec les assassins de mon ami, dit le capitaine qui disparut en laissant les convives étonnés.》<sup>51</sup>

結果的には手違いから殺されてしまうとはいえ上のメルルの最後の台詞は、彼もまた誇り高きフランス軍人の一人であることを再度強調するものだ。

こうした態度からみても、ジェモールとメルルは個性に違いはあれ、二人ともユロという人物が象徴的に示す軍人の、より具体的な例としての役割を担っていることになる。

## IV

### 1. マルシュ・ア・テール

ジェラルあるいはメルルが共和派の典型的な軍人であるとするならば、ふくろう党での彼らと同じ存在がマルシュ・ア・テールである。前述の二人については兵士としての誇りなど精神的な面が強調されていた。しかし、マルシュ・ア・テールを始めとするふくろう党員の描写では、彼らの直接的な行動と、残酷さや不気味さに重点がおかれている。彼の登場する場面もそうしたものである。

«—Tu demandes pourquoi? répondit une voix.

En entendant des sons qui semblaient partir de la corne avec laquelle les paysans de ces vallons rassemblent leurs troupeaux, le commandant se retourna brusquement comme s'il eût senti la pointe d'une épée, et vit à deux pas un personnage encore plus bizarre qu'aucun de ceux emmenés à Mayenne pour servir la République.»<sup>43</sup>

この場面以外では彼はいつも唐突に姿を現す。こうした登場の仕方はふくろう党自体の神出鬼没さをも象徴している。

彼はその後の行動においてもあくまでふくろう党の代表格として振舞う。そうした凶暴な行動の一つの極限が以下の場面に見られる。

«Marche-à-terre prit cette tête par une touffe de cheveux, sortit de la chaumière, chercha et trouva dans le grossier chambranle de la porte un grand clou autour duquel il tortilla les cheveux qu'il tenait, et y laissa pendre cette tête sanglante à laquelle il ne ferma seulement pas les yeux.»<sup>44</sup>

《青》の兵士が死の瞬間まで誇り高い軍人であったのと同様、マルシュ・ア・テールとその仲間最後まで残酷で暴力的なふくろう党の農夫なのである。

## 2. デュガ夫人

デュガ夫人はもちろんふくろう党の首領ではない。しかし前述のようにモンローラン侯爵が理想主義に陥っている間に、実質的に彼等を指揮するのがこの女性である。彼女はその登場からある種の威厳を備えてその役割を十分に暗示している。

すでに見たようにモンローラン侯爵が郵便馬車襲撃に関して口論しているときに彼女は以下のような意見を述べる。これによって彼女が侯爵よりも遙かに現実的に事態を把握しているということが分かる。

«(...) Vous avez perdu des hommes, nous n'en manquerons jamais. Le courrier porte de l'argent, et nous en manquerons toujours! Nous enterrerons nos hommes qui iront au ciel, et nous prendrons l'argent qui ira dans les poches de

tous ces braves gens. Où est la difficulté?》<sup>98</sup>

この場面以後もデュガ夫人はことあるごとに自分の意見を主張し、首領が同席しているにもかかわらず、あたかも自分が指導者であるかのように行動することが多い。そして党员たちもそうした彼女の指示に従うことになる。

しかし、その役割は次第に変化していく。すなわちヴェルヌイユ嬢の恋敵としての立場の行動が多くなる。そしてそれに伴い彼女の性格についての描写も嫉妬や憎しみなど感情的なものが増してゆく。例えばそれがヴェルヌイユ嬢の項で述べたつかみ合いの場面である。彼女はヴェルヌイユ嬢が隠し持っていた密書を奪い取り仲間の前で読み上げるのだ。

こうした言動の繰り返しが彼女の恋敵としての役割を不動のものとする。いわば完璧な嫌われ役を演じるわけである。この主人公に対する恋敵としての役割は次に述べるコランタンのそれと共通するものと言える。

## V

フランス政府の密偵であるコランタンはもちろん政府軍と同じ側の人物である。しかし彼は物語の舞台を離れることが多く、その役割もユロを始めとする軍人たちとは全く違っている。彼はヴェルヌイユ嬢やその護衛の《青》と同時に登場するが、その時すでにヴェルヌイユ嬢からも兵士たちからも軽蔑され嫌われているのだ。

コランタンは登場後しばらくはどのような人物か明らかにされない。その人格が徐々に判明するのは、一行が身分を偽ったモンローランとデュガ夫人に会ってからである。

《—(...) Ce petit jeune homme est rusé ; je le prenais pour un sot, mais maintenant je le crois aussi fin que je puis l'être moi-même.》<sup>99</sup>

《—Si c'est là un républicain, se dit Corentin en le voyant sortir, je veux être pendu ! Il a dans les épaules le mouvement des gens de cour. Et si c'est là sa



mère, se dit-il encore en regardant madame du Gua, je suis le pape! Je tiens des Chouans. Assurons-nous de leur qualité?》<sup>10</sup>

以上は彼の洞察力や推理力を示す例である。しかし周りの人物が彼に与える評価はやはり否定的なままである。こうした彼の能力の一端としてモンローンが名乗っていた偽名の調査がある。次の会話はユロとヴェルヌイユ嬢の間で交わされるものだ。

«—Tonnerre de Dieu, mademoiselle, le fantassin qui vous accompagne est venu me prévenir que les voyageurs et le courrier avaient été assassinés par les Chouans, (...)

—Oh! s'il y a du Corentin là-dedans, je ne m'étonne plus de rien, s'écria-t-elle avec un mouvement de dégoût.》<sup>10</sup>

この場面の前にコランタンは姿を消している。つまり“舞台裏”でその偽名に関する調査を行っていたのだ。こうして彼は陰で何か企むという役割を演じ始める。そしてその行動の鋒先はヴェルヌイユ嬢に対しても向けられていく。

同時に彼の個性も明確にされる。すなわちコランタンもまたヴェルヌイユ嬢に対して愛情を抱いているのである。そして彼は彼女を手に入れるために恋敵であるモンローンをぜひともして捕えようとし、ヴェルヌイユ嬢をたとえ辱しめてでも手に入れようとするのだ。

«—(...) D'ailleurs, dit Corentin en regardant le commandant étonné, je suis là pour l'empêcher de faire des sottises, car, selon moi, camarade, il n'a y a pas d'amour qui vaille trois cent mille francs.

Quand ce diplomate de l'intérieur quitta le soldat, ce dernier le suivit des yeux; (...).》<sup>10</sup>

つまりコランタンはデュガ夫人の場合と同様に主人公の敵となるのだ。しかも彼の企む陰謀は効果的なので、感情的にヴェルヌイユ嬢に敵対するデュガ夫人より、主人公二人にとってはより危険な相手と言える。事実ヴェルヌイユ嬢が最終的には自分たち二人を破滅へと導く罠を用意するのも、コランタンの計

略によるものであるし、モンローランを実際に捕らえるのも彼なのである。

## VI

今まで分析してきた人物たちは、物語のストーリーを構成していく上で様々に関係しあっている。こうした人物の相互関係において特に顕著な特徴は、彼等が対立あるいは対決している場面が非常に多く見られるという点である。この章ではそうした対立関係を順を追って考察していくことにする。

物語が始まるとすぐにユロ、次いでマルシュ・ア・テールが登場し、二人の対立によって物語がにわかに緊迫する。そしてこの睨み合いがそのまま《青》とふくろう党との戦闘に発展する。こうして物語における最初の大規模な対決が起こる。

この戦闘の後、すでに見てきたようにふくろう党内で議論が起こる。ここで見られるのはモンローラン侯爵と、マルシュ・ア・テールを始めとするふくろう党員そしてデュガ夫人との対立である。これは大きな事件ではないが、侯爵と彼の部下との根本的な相違点が明確にされるという意味で重要である。

第2章にはいとヴェルヌイユ嬢が登場し旅館でモンローランたちと出会う。ここでは様々な対立関係を見ることができる。デュガ夫人とコランタン、モンローランとコランタン、デュガ夫人とヴェルヌイユ嬢などそれぞれがお互いに相手の正体を探り合う。さらにユロが登場してくることで新しい対立が生まれる。ユロとモンローラン一行との対立が、更にヴェルヌイユ嬢とユロとの敵対関係をも生み出すことになる。

続くヴィヴチエールの館ではモンローランと他の貴族など小さな対立がいくつか見られる。その中で二つの決定的な対立が起こり、ヴェルヌイユ嬢と《青》はそれぞれ破局を迎える。ヴェルヌイユ嬢はデュガ夫人との対決で自分の正体を明かされ、軍隊はほぼ全員がふくろう党との対決で殺されてしまう。

この破局から逃れたヴェルヌイユ嬢は、フージェールで待ち受けていたコラ

ンタンと対立することになる。

次にヴェルヌイユ嬢はふくろう党の館へ忍び込む。ここでは直接彼女と対立する人物はいない。モンローラン、デュガ夫人それに他の指導者たちが彼等を物陰から見るヴェルヌイユ嬢と間接的に対立することになる。そして彼女の脱出に合わせて、今度は《青》とふくろう党という大規模な対決が起こる。

どうにか危機を脱したヴェルヌイユ嬢は今度はサン・ジャムで行われるふくろう党の宴会において三たびデュガ夫人と対決する。もちろんデュガ夫人だけではなくモンローランや他の貴族たちとも正面から顔を合わせる。このあと再び《青》とふくろう党の間で戦闘が起こる。

さらにヴェルヌイユ嬢はコランタンと対立する。さきに述べたようにコランタンの態度は恋する男のそれから敵対者そのものの行動にまで変化する。そしてこの対立がコランタンの最後の計略を生み出す。

こうして全てを巻き込む最後の対決が用意される。ここでは《青》とふくろう党が戦闘を行うこととなり、そのどちらとも対立するモンローランとヴェルヌイユ嬢はついに殺されてしまう。後に残るのはユロたち《青》の兵士ばかりで、そのユロとコランタンの対立がこの物語の幕を閉じる。

## Ⅶ 結 び

以上考察してきたように『ふくろう党』の登場人物をその役割から見ると、メンバーの構成が政府側とふくろう党側で等しいものになっていることが分かる。つまり、どちらのグループにも特定の役割を与えられた人物が分配されているのだ。その関係を表にすると以下の通りである。

	政 府 軍	ふ く ろ う 党
理想主義者・観念的な代表者	ユロ	モンローラン
兵士の典型的例	ジェラルル、メルル	マルシュ・ア・テール
策謀家・主人公の直接の敵対者	コランタン	デュガ夫人

これらの人物がヴェルヌイユ嬢を中心として複雑に関係しあって物語が構成されているのである。

大きな特徴を見せる彼等の対立関係をヴェルヌイユ嬢を中心に整理するならば、彼女の運命を左右する対決が3度あるといえよう。

最初の対決はアランソンの旅館での宿命的な出会いである。ここでヴェルヌイユ嬢の恋が始まると同時にデュガ夫人との敵対関係も始まる。

第2の対決はヴィヴチエールの館である。ここで彼女の運命は大きく変わる。

第3の対決はコランタンとの最後の対立であり、前章で述べたように彼女ならびにモントーランの死の原因となる罫はこの対立に端を発するのだ。

このように重大な対決には全て上で述べた主人公の直接の敵対者が関与していることに注目したい。そして、これら主要な3つの対決の間隙を埋めるべくその他の小規模な対立が緊張感を保ちつつ配置されているのだ。

## 付 記

作品及び登場人物の日本語表記については、『ふくろう党』（桑原武夫、山田 稔、田村 俊叔、バルザック全集第1巻、東京創元社、1973）を参照させていただいた。

## 注

- (1) Honoré de BALZAC : *Les Chouans*, dans *la Comédie Humaine*, La Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, T. VII, p. 827.
- (2) *ibid.* p. 829.
- (3) *ibid.* p. 828.
- (4) *ibid.* pp. 802-803
- (5) *ibid.* p. 920
- (6) *ibid.* p. 989
- (7) *ibid.* p. 845
- (8) *ibid.* p. 924
- (9) *ibid.* p. 1070
- (10) *ibid.* p. 908

- (11) ibid. p. 912
- (12) ibid. p. 913
- (13) ibid. p. 774
- (14) ibid. p. 1036
- (15) ibid. p. 803
- (16) ibid. p. 839
- (17) ibid. p. 839
- (18) ibid. p. 851
- (19) ibid. p. 926

(大学院博士課程後期課程)